2023年10月15日  川越教会

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　丸山　勉

「慰めよ、慰めよ」との声

［イザヤ書40章1節～8節］

慰めよ、わたしの民を慰めよと／あなたたちの神は言われる。  
エルサレムの心に語りかけ／彼女に呼びかけよ／苦役の時は今や満ち、彼女の咎は償われた、と。罪のすべてに倍する報いを／主の御手から受けた、と。  
 呼びかける声がある。主のために、荒れ野に道を備え／わたしたちの神のために、荒れ地に広い道を通せ。  
 谷はすべて身を起こし、山と丘は身を低くせよ。険しい道は平らに、狭い道は広い谷となれ。   
 主の栄光がこうして現れるのを／肉なる者は共に見る。主の口がこう宣言される。  
 呼びかけよ、と声は言う。わたしは言う、何と呼びかけたらよいのか、と。肉なる者は皆、草に等しい。永らえても、すべては野の花のようなもの。  
 草は枯れ、花はしぼむ。主の風が吹きつけたのだ。この民は草に等しい。  
 草は枯れ、花はしぼむが／わたしたちの神の言葉はとこしえに立つ。

[1]　「御言葉」には、神様の血がかよっている

御（み）言葉信仰という言葉がありますね。私は若い時、その言葉に若干違和感を感じていました。信仰というのは、イエス様を信じることでしょう？“御言葉”は、神様ご自身じゃないではないか、御言葉を信じるというのは、何かおみくじを信じるみたいで嫌だな、信仰ってもっと人格的なことでしょうと思ったのです。ちょっと恥ずかしいですが…。でも今は、御言葉をそのまま信じ受け止めるということはとても幸いなことだと思っています。先ほども讃美歌で（他の歌詞では）、「主よ、いのちの言葉を与えたまえ」とありましたが、本当に御言葉はいのちの言葉、神様の血がかよった、とても人格的な言葉であると思うんです。神様は、私たちをただ漠然と守って下さるお方ということよりも、言葉を持って私たちに関わって下さるお方、叱咤激励し、励まし、慰めて下さる、生きたお方だと思いますし、そのことを旧約聖書も新約聖書も証ししていると思います。

ですから神様の言葉というのは生きていて、歴史を作ります。新しい出来事を創造します。創世記の初めに「神は、光あれと言った。すると光があった」とあるように、主の言葉と出来事は直結しているのだと改めて思います。

今日は、旧約聖書の「イザヤ書」40章の初めの部分を読んで頂きました。これは正に新しい歴史の転換点です。「イザヤ書」というのは、内容的に幾つかの時期に分けることが出来ると言われていまして、この40章以下は、紀元前6世紀にあった、イスラエルの人々のバビロン捕囚という、人々が失望のどん底にあったような時期に立たされた無名の預言者（第二イザヤとも言われます）による神様の言葉の伝達が記されている箇所、全聖書的にもとても重要な箇所です。この預言者については詳細は不明なのですが、バビロニアにおいて神様の言葉を受けたと言われています。イスラエルの民はそこで、私は神様に捨てられてしまったのだろうか、罪深い私はもう神様に合わす顔がない、という、前を向けない中に置かれていたと思います。しかしその時にも、なお神様からの言葉は語りかけられる、という事実がここにあるのです。それをイザヤは例えばこういう表現で語っています。―「肉なる者は皆、草に等しい。永らえても、すべては野の花のようなもの。草は枯れ、花はしぼむ。主の風が吹きつけたのだ。この民は草に等しい。草は枯れ、花はしぼむが／わたしたちの神の言葉はとこしえに立つ。」

[2] 天井の神様の会議において

神様が言葉を発せられる。これは一面、とても恐ろしいことです。旧約の他の箇所でもお分かりになるように、神様の臨在に触れ、またその声を聞くというのは、自分が主の前に立たされるということでもあるのですから。しかし、神様は、私たちを虫けらのよう扱い、踏みつぶすようにして裁く、ということはなさらない方です。もしそのようであるなら、この世界は遠の昔になくなっていると思います。そうではありません。

今日のこのイザヤ書でとても面白いのは、神様が会議を開いた結果、イザヤは語るというような記述になっている、ということです。イザヤは、自分の言葉ではなく「呼びかけよ」と言われて語るのです。それを促すのは、ここでは天的な存在、天使と言っても良いと思います。この天使たちが、天上の会議の場にいて、神様の結論（宣言）を聞くのです。初めの1節。「慰めよ、わたしの民を慰めよと／あなたたちの神は言われる」と。神様が、絶望的な思いを抱えている者たちに、神様の慰めを伝えるように言っていますよと、天使はイザヤに言います。そしてその慰めの内容とは、新しい歴史を神様が開くということです。―「苦役の時は今や満ち（＝終わり）、彼女の咎は償われた、と。罪のすべてに倍する報いを／主の御手から受けた、と」。これは、逆転です。バビロン捕囚から解放されるということは、神様があなた方の罪を償って下さった、という神様の赦しがそこに起こったということなのですよと言っているのです。イスラエルよ、あなたが回心したからではなく、神様が一方的に憐れんで下さったからなのですと。そしてそれが起こる。

　神様が“会議”をされるというのは、ちょっと考えると少し奇妙かも知れません。ご自分の尊厳でどんどんことを決めて運ぶ方が神様らしいと私たちは思います。しかし、神様は、愛ゆえに葛藤されているからこそ会議を行うのではないかと思います。「正義」という試験紙に潜らせれば、イスラエルは不信仰に陥り、審きを受けて当然の判決を受けるでしょう。しかしそうではなく、「憐み」という神様の思いが勝ったのです、天上の会議の結果。イスラエルは、再び神様と出会い直す。それが3節以降です。―「呼びかける声がある。主のために、荒れ野に道を備え／わたしたちの神のために、荒れ地に広い道を通せ。谷はすべて身を起こし、山と丘は身を低くせよ。険しい道は平らに、狭い道は広い谷となれ。主の栄光がこうして現れるのを／肉なる者は共に見る。」

そしてそのあと、“肉なる者”とはどういう存在なのかを続けて語っていると思います。「呼びかけよ、と声は言う。わたしは言う、何と呼びかけたらよいのか、と。肉なる者は皆、草に等しい。永らえても、すべては野の花のようなもの。草は枯れ、花はしぼむ。主の風が吹きつけたのだ。この民は草に等しい。」―あなたは人間、まるで枯れて行く草、しぼんで行く花のよう。あなた方は、草に等しいと言います。ニヒルですね。でも、ある意味確かにそうです。私たちは草花のはかなさを思い、いつまでも咲いている花など無いように、やがては全て滅びて行く運命にあるのだという言葉の方にどこか魅力を感じ、「所詮人生なんてこんなもの」と思ってしまうこともあるかも知れません。しかし、ここで神様はイザヤに呼びかけなさい、と命じるのですね。人間への最終的な言葉は、諦めでも滅びでもありません。私は来週の永眠者記念礼拝でもこのことを語ったら良いのかと思っているのですが、最終的な言葉は、「草は枯れ、花はしぼむが／わたしたちの神の言葉はとこしえに立つ」です！虚しい私の現実を知り、知り尽くし、しかし私を滅ぼさず、とこしえに導いてくれるのは、神様の御言葉なんだと、神ご自身が言っておられるのです。そして、そのことを伝えなさいと。

[3]　まことの「慰め」主である主イエス・キリスト

このイザヤ書40章8節の言葉を、新約聖書のペトロの手紙一1:24～25では、このように引用しています。「こう言われているからです。「人は皆、草のようで、その華やかさはすべて、草の花のようだ。草は枯れ、花は散る。しかし、主の言葉は永遠に変わることがない。」これこそ、あなたがたに福音として告げ知らされた言葉なのです。」

 草も必ず枯れるし、花の華やかさも消えて行く時がある。それは私たち自身のことです。しかし、「主の言葉は永遠に変わることがない」と言うのです。イザヤ書の方では「神の言葉」でしたが、新約聖書のこの箇所では 「主の言葉」となっています。これは敢えて「主」という言葉を使ったに違いありません。「主」とは、主イエス・キリストです。

私たち新約の時代に生きる信仰者も、イスラエルの信仰共同体と同じだと思います。信仰者だからと言って順風満帆で歩めるなんていうことはありません。ヘブライ人への手紙が言うように、“神様は、愛する者たちに当座は喜ばしいとは思えないような試練をお与えになる”ことが人生にはありますよね。パズルが全部はまってスッキリして歩める人生なんて恐らくないでしょう。それは根本的には私たちが自己中心だからではないでしょうか。神様の言葉を聞こうとしない、むしろ軽んじている、だから心に平安がない。私自身、主との交わり・祈りが欠けると本当に立って行けなくなる、そんなことばかりです。でも神様は、そんな私たちだからこそ、御言葉を語り続けて下さるのです！

「慰めよ、わたしの民を慰めよとあなたたちの神は言われる」（イザヤ40:1）とイザヤに告げた神様は、どんな私たちであろうが私たちをお捨てにならず、忍耐の末に、愛し抜かれて、この“肉なる存在”である私たちの同伴者として、肉を取られた主イエス・キリストをお遣わし下さったのです。そして、十字架の上で、私たちの苦役（捕囚）の時を終わりにし、神様との真の平和の中へと導いて下さいました。主ご自身が血を流し、痛むことによって、私たちはもう一度神の懐の中に招かれ、今、招かれています！そしてこのお方は、今、御言葉と聖霊を通して私たちと共にいて下さいます。聖書は告げています。このお方の別名は「インマヌエル」であり、「慰め主」だと。私たち、このお方の声に導かれて生きて行きたいと思います。お祈り致します。

主よ、御言葉を感謝致します。こんな自己中な者にもあなたはなお語りかけることをお止めになりません。そして、私たちと共に生きる御言葉・主イエス・キリストをお送り下さったことを感謝致します。私たちはあなたの慰めの中を生きて行きたいと思います。今この世界が、大きな試練の中にあります。主よ、あなたに立ち帰ることだけが救いであることを思います。忍耐と慰めの神様、あなたの御心を私たちが聞き続け、隣人と共に生きる世界を身近な所から作って行くことが出来ますように。主イエス・キリストによって祈ります。アーメン。